

## 平成23年度 1年間の歩み レポート

所属校	熊谷市立富士見中学校	職名	教諭	氏名	浅沼勇弥
-----	------------	----	----	----	------

### テーマ 「一人一人が生き生きと活動できる学校生活のあり方 ～個別の指導計画による指導の充実～」

#### 1 テーマに関する勤務校の現状

本校には特別支援学級は3学級、18名の生徒が在籍している。知的障害特別支援学級が2学級、7名の学級と6名の学級、自閉症・情緒障害特別支援学級が5名の1学級である。教員数は特別支援学級の主任と各学級担任の計4名である。市費対応の特別支援学級支援員が3名、毎日5時間勤務している。また、熊谷市で唯一の中学校の通級指導教室があり、2名の教員と2名の支援員がいる。年度途中で、通常学級から通級指導教室、特別支援学級にくる生徒も多く、連携をとりながら指導を行っている。

本校は、個別の教育支援計画・個別の指導計画を数年前から、すべての特別支援学級の生徒に作成している。担任が5月までに生徒の実態を把握し作成している。活用に関しては、特別支援学級の教員は必要なとき確認する程度であり、交流学級の担任や交流授業の教科担当の教員が見ることはあまりない。

#### 2 テーマに関する勤務校の課題

個別の教育支援計画・個別の指導計画は、作成するが活用はされていない。4月に作成し、市に提出してから、加筆、修正は行われず、また、保護者にも提示していない。交流及び共同学習を積極的に行っている本校だが、交流学級の担任や、交流授業の教科担当に、個別の教育支援計画・個別の指導計画を見せることはない。また、生徒について情報を共有することもない。生徒の理解が深まらないのが現状である。

個別の教育支援計画・個別の指導計画は、個々の生徒の障害の状態や発達段階などの確な実態把握を基に、指導目標及び指導内容を明確にして作成されることで指導に生かすことができる。本来の目的をもう一度見直し、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行いたい。

#### 3 課題解決策

##### ①本人、保護者と共に作成する

本人、保護者の願いなど必要な部分は保護者に聞きとりをして作成していたが、それだけでなく、すべての部分で保護者と個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成することにした。家庭訪問で十分な時間をとり、今までの学歴から、生徒の実態、1年間の目標設定、教科ごとの目標の設定など、本人、保護者と確認しながら作成した。学期ごとの評価もこの個別の教育支援計画・個別の指導計画を活用することにした。生徒の共通理解を図りながら、保護者に4月、7月、10月、12月、(3月)と提示した。保護者と確認しながら、加筆、修正を行い、生徒一人一人の課題に沿った目標を立て、授業を行うことができた。

②交流学級の担任と個別の教育支援計画・個別の指導計画を一緒に作成していく。

特別支援学級では見せない生徒の姿や、逆に交流学級では見せない生徒の姿を、個別の教育支援計画・個別の指導計画をもとに話し合うことで、さらに生徒への実態把握につながった。個別の教育支援計画・個別の指導計画の存在を知らせる機会にもなった。

③教科の教員と個別の教育支援計画・個別の指導計画を一緒に作成していく。

通常学級の中で特別に支援をすることは難しいが、一緒に作成したことで、生徒の実態を把握でき、支援につなげることができた。生徒は、教科の学習の理解も深まり、意欲につながった。

④定期的に生徒のことを話す時間を確保していく。

空き時間や放課後など、個別の教育支援計画・個別の指導計画を見直す時間を定期的に確保したことで、生徒の理解が深まった。

⑤個別の教育支援計画・個別の指導計画に、交流授業の目標を設定し、交流及び共同学習をさらに推進していくことで、特別支援学級の生徒、そして、通常学級の生徒とのノーマライゼーション教育の推進を図る。

朝読書、朝の会、給食、学活、行事等にはすべての生徒が参加し、生徒の実態に応じて音楽、美術、体育、技術・家庭科、社会など多くの授業にでることで、関わりが深くなり、理解につながった。教員が障害のある生徒に関わる時間が増え、学校全体で特別支援学級への生徒の理解が深まった。

#### 4 期待される成果

担任、本人、保護者、教員間で話し合いを行い、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成、活用していく中で一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行うことができた。また、個別の教育支援計画・個別の指導計画を基にすることで、教員間の連携がスムーズになり、より生徒にとっての授業の工夫につながった。情報を共有し、生徒の特徴を理解し、生徒に関わる全ての教員が共通の指導の仕方ですべての生徒が混乱することなく、学習を行うことができた。通常の教員の障害のある生徒に対する理解も深まり、ノーマライゼーション教育の推進につながった。

#### 5 今後の課題

個別の教育支援計画・個別の指導計画を使用することで、担任、本人、保護者、他の教員と計画、実施、評価、改善・更新の手順を確立し、実践の評価が次の計画につなげることができた。多くの人間が関わることで、生徒の事態をより正確に把握でき、成長につなげることができた。

通常学級生徒の個別の教育支援計画・個別の指導計画を充実していくことが今後の課題である。特別支援学級の生徒の支援は充実しているが、通常の生徒で支援を要する生徒は、校内支援体制を作り、学校全体で支援を組んでいかなければならない。そのための1つのツールが、個別の教育支援計画・個別の指導計画である。今回の経験を生かし、すべての生徒に個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成することが理想である。そして、誰が見ても、分かりやすく、すぐに参考になる個別の教育支援計画・個別の指導計画を今後も考えていきたい。